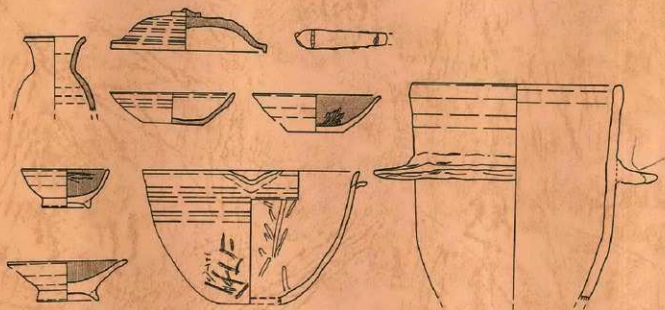


ぶ ぎょう どう  
豊 饒 堂 遺 跡 Ⅲ

株式会社ウインテック工場建設に係る緊急発掘調査報告書



2004. 3

株式会社ウインテック  
坂城町教育委員会

豊ぶ 饒ぎょう 堂どう 遺 跡 III

2004. 3

株式会社ウインテック  
坂城町教育委員会



調査区全景 東より

## 序

坂城町教育委員会教育長 大橋 幸文

坂城町豊饒堂遺跡は、大峰山(1327m)を主な水源とする御堂川によって形成された扇状地のほぼ扇尖に立地している。いま豊饒堂と呼ばれているが、豊饒堂の地名は、不入堂の地名と併せて、江戸時代の文書に登場している。今回発掘された遺跡の時代に、このような地名が使用されていたかは、不明であるが、考えさせられる地名であり、土地である。

地名はその土地の文化遺産であることを考えると、不入はこの地を支配した有力者によって、囲いこまれた土地であり、その土地が豊かな土地であったことを物語る豊饒と瑞祥地名で書き表わされたものであろう。

事実この土地は、江戸時代から盛んになった養蚕を支えた広大な桑園であった。維新後ますます盛んになった坂城町域の養蚕業を支えた桑園となり、第二次世界大戦後は、りんごを主体とした果樹地帯と変わり、さらに都市化・工業化の進展にともない、工場や住宅の進出が進んだ地域である。千曲川の流れを望む風光の美しい土地であり、今後の発展もこの地名が裏付けているように思われる。

今回の発掘調査で特筆される発見は、平安時代のたたら製鉄遺跡である。羽釜や羽口の破片が検出され、大量の鉄滓(金屎)が見つかることから、製鉄が盛んであったことがわかる。なかでも刀子の発見は、製鉄の技術の高さを物語っている。鉄は、農具などにも使用されたことであろう。この土地の生産性の高さに結びついたものと考えられる。

豊饒堂遺跡と御堂川をはさんで至近に、開畝製鉄遺跡が発見されている(1978『開畝製鉄遺跡—第1次調査報告』1979『第2次調査報告』)。開畝は室町時代の大規模な製鉄遺跡であり、人間国宝に指定された故宮入行平刀匠が、坂城町における製鉄と日本刀の発祥地として自ら遺跡の発掘調査にたずさわったことで知られている。

豊饒堂遺跡のたたら製鉄跡は、開畝製鉄遺跡に先立つ遺構であり、刀子の発見もあり、貴重な遺跡である。坂城町の製鉄と日本刀のルーツは、平安時代にまでさかのぼることが明らかになった。

発見された住居址や遺物もそのほとんどが奈良時代から平安時代のもので、この地に営まれた人々の生活を知ることができる貴重な発見である。遺跡は、集中豪雨による御堂川の氾濫によって埋没されたものであろう。その地にまた新たな光が当てられた。

豊饒堂遺跡の発掘調査は、株式会社ウインテックの工場建設に先立って実施された。寺島利勝社長のご高配と、調査に当たられた皆様の熱意と努力によって、この報告書に見るような成果を上げることができた。改めて埋蔵文化財の調査に対するご理解とご協力、調査のご労苦にお礼を申し上げ序文とする。

## 例 言

- 1 本書は、長野県埴科郡坂城町豊饒堂遺跡Ⅲの発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社ウインタックより委託を受け、坂城町教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査所在地及び面積  
豊饒堂遺跡Ⅲ 長野県埴科郡坂城町大字中之条1375-1ほか 1432㎡
- 4 調査期間 試掘調査 平成15年2月17日～2月20日  
現地調査 平成15年3月10日～4月18日  
整理調査 平成15年4月21日～平成16年3月31日
- 5 本書の主な執筆・編集は、塩入・齋藤が行った。
- 6 本書の作成にあたり、齋藤のほか、朝倉、天田、坂巻、塚田、萩野が主な作業を行った。
- 7 本書で使用した航空写真は、(株)みすず総合コンサルタントが撮影したものである。
- 8 本書及び調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において保管されている。
- 9 本調査及び本書作成にあたって、下記の機関から御配意を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略)  
株式会社 関川建設、株式会社 高橋組、(社)更埴地域シルバー人材センター

## 凡 例

- 1 遺跡の略号は、下記のとおりである。  
H→堅穴住居址 F→掘立柱建物址 R→製鉄関連遺構 D→土坑址 Q→特殊遺構  
P→ピット M→溝状遺構
- 2 遺構名は、時代別ではなく発掘調査時における命名順である。
- 3 本書に掲載した実測図の縮尺は該当個所のスケールの上に記した。
- 4 挿図中におけるスクリーントーンは、下記を示す。  
遺構 遺構構築土→斜線 焼土→網点  
遺物 須恵器断面・土師器黒色処理→網点
- 5 遺物の挿図中での表記は、第1図1は、簡易的に1-1と表記した。
- 6 土層の色調は『新版 標準土色帖』の記載に基づいて記載した。
- 7 出土遺物の観察表の法量は、口径・底径・器高の順に記載し、一は不明、( )が残存値、< >が推定値、( )・< >がない場合は、完存値を示し、単位はcmである。
- 8 土師器・須恵器の器種名は、以下の文献を参考にした。  
(財)長野県埋蔵文化財センター 1999『更埴条里・屋代遺跡群 一古代1編一』  
2000『更埴条里・屋代遺跡群 一古代2・中・近世編一』

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る動機と経緯	1
第2節 調査の構成	2
第3節 調査日誌	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の概要	7
第1節 調査の方法	7
第2節 基本順序	8
第3節 検出された遺構・遺物	8
第Ⅳ章 調査の結果	10
第1節 竪穴住居址	10
第2節 掘立柱建物址	16
第3節 製鉄関連遺構	17
第4節 土坑址	21
第5節 その他の遺構	26
第Ⅴ章 総括	27
出土遺物観察表	29
写真図版	31
あとがき	
報告書抄録	

# 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

## 第1節 発掘調査に至る動機と経緯

豊鏡堂遺跡は、坂城町中之条地区を西流し千曲川へと注ぐ御堂川によって形成された扇状地上に所在している遺跡で、『坂城町遺跡分布図』によると縄文時代から平安時代の集落址とされている。

豊鏡堂遺跡では過去2回の発掘調査が実施されている。最初の発掘調査は、平成5年に県単高速道路関連道路改良事業に伴って実施された。この調査では弥生時代、平安時代に属する竪穴住居址や奈良時代の火葬墓が検出されている。次の調査は平成13年にふるさと農道建設に伴って実施されたもので、奈良時代から平安時代のものと思われる掘立柱建物址や竪穴状遺構が検出されている。

今回、株式会社ウインテックが工場の建設を計画したため、平成15年2月に坂城町教育委員会が試掘調査を実施した。調査の結果、奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡等の遺構、土器片等の遺物が検出されたため、遺跡の保護措置を講じることが必要となり、株式会社ウインテックと坂城町教育委員会で保護協議を行い、坂城町教育委員会が緊急発掘調査を実施することとなった。



第1図 豊鏡堂遺跡III位置図 (1:25000)

## 第2節 調査の構成

### 発掘調査体制

- 調査指導者 塩入 秀敏（上田女子短期大学教授、日本考古学協会会員）  
調査担当者 助川 朋広（坂城町教育委員会学芸員）、齋藤 達也（坂城町教育委員会学芸員）  
調査補助員 朝倉妙子、天田澄子、塚田さゆり（以上、町臨時職員）  
調査協力者 伊藤篤、今井節夫、久保高久、滝沢かつ子、滝沢袈裟夫、三井清子、宮崎米雄（以上、更埴地域シルバー人材センター派遣作業員）  
竹鼻茂、谷川直和、藤城翔、橋沢勲夫（株式会社高橋組派遣）

### 整理調査体制

- 調査指導者 塩入 秀敏（前出）  
調査担当者 助川 朋広（前出）、齋藤 達也（前出）  
調査補助員 朝倉妙子、天田澄子、坂巻ケン子、塚田さゆり、萩野れい子（以上、町臨時職員）  
調査協力者 荒川園子、伊藤篤、神戸武子、桐山みな子、近藤金子、竹内一子、宮沢淑夫（以上更埴地域シルバー人材センター派遣作業員）

### （事務局）

- 教育長 大橋 幸文  
生涯学習課長 塚田 好一  
文化財係長 坂口ふみ江（平成15年3月31日退任）  
助川 朋広（平成15年4月1日就任）  
文化財係 齋藤 達也  
朝倉妙子、天田澄子、坂巻ケン子、塚田さゆり、関貴子、谷川直和、萩野れい子（以上、町臨時職員）

## 第3節 調査日誌

- 平成15年3月10日 発掘調査開始。本日より表土剥ぎを開始。  
3月14日 重機による表土剥ぎ完了。調査区全域の遺構検出作業開始。  
3月17日 検出中に鉄滓が出土した遺構をR1号製鉄関連遺構と命名して調査を開始。  
3月18日 H2号住居址で遺存状態が良好なカマドを検出。  
3月26日 R3号製鉄関連遺構より刀子が出土。  
3月27日 H1、4号住居址完掘。  
3月28日 H3号住居址完掘。  
4月6日 現地説明会を実施。  
4月15日 H2号住居址完掘。  
4月17日 空中撮影を実施し、発掘調査を終了。



## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

坂城町は北信地方と東信地方の接地点にあたり、善光寺平を構成する更埴地方の最南端に位置する。また、町は貫流する千曲川の氾濫によって形成された氾濫原と、千曲川に流れ込む小河川がつくりだす扇状地によって形成された坂城盆地と呼ばれる幅広い小盆地に立地している。町の北から東にかけては五里ヶ峰・大峰山・虚空蔵山をはじめとする標高1100～1300m前後の山々が連続し、千曲市、真田町、上田市との市町村界を形成し、西は大林山、三ッ頭山などの標高1000m前後の山々が連続し、千曲市、上田市との市町村界となっている。南は千曲川右岸の岩鼻と左岸の半過の岩鼻が狭隘な地形を形成し、上田盆地と隔てられている。このような地形から、古来よりこの地域は千曲川流域の要衝として注目されてきた。

この地域の気候は、南北に開けた広谷をなしていることから、季節風の影響を受けやすいため、夏季は南風、冬季は北風が強い。また、盆地状になっていることから寒暖の差が大きい。降水量は少なく、日本で最も雨量の少ない地域の一つとされている。現在では、この気候を生かして、工業が主要な産業となっており、農業では、バラ・ぶどうの栽培が盛んである。

### 第2節 歴史的環境

ここで、坂城町の各時代について代表的な遺跡を挙げつつ、町の歴史的環境について概略的に触れておくこととする。(括弧内の数字は第2図における遺跡番号を示す。)

後期旧石器時代の遺物は、保地遺跡で上ヶ屋型彫刻器とされる石器が採集されている(3-1)。縄文時代の遺構・遺物では、早期押型文系の土器が坂城地区の和平A遺跡や平沢遺跡(35)で採集されている。また、平成12年度に発掘調査が実施された坂城地区の込山C遺跡(30-3)からも押型文系の土器片が出土しているが、これらは現在整理中である。この他に込山C遺跡では縄文時代前期・中期の住居址も確認されている。後期・晩期では、学史的にも有名な南条地区の保地遺跡が挙げられる。平成11年度に実施された発掘調査では、縄文時代後期・晩期の土器片や石器が多数出土したほか、少なくとも19個体分の人骨を伴う縄文時代後期の配石墓が検出されている。縄文時代晩期の遺物では、昭和初期に透光器土偶の頭部が込山D遺跡(30-4)より採集されている。

弥生時代では、中期の遺跡として坂城地区の込山B遺跡が挙げられる。平成11年度に発掘調査が実施されているが、現在整理中である。後期後半では、平成5年度に実施された南条地区の塚田遺跡(1-7)の発掘調査で、この時期に属する竪穴住居址36棟をはじめとする遺構と、土器、石器、土製品、及び鉄器などが出土している。

古墳時代では、前期古墳は確認されていないが、中期古墳には中之条地区の仮称東平1号墳・2号墳が挙げられる(注1)。これらは、平成6年度に上信越自動車道建設に伴い発掘調査が実施されている(若林 1999)。後期古墳では、町内でもいくつかの古墳群の存在が知られているが、中でも代表的なものは、村上地区の福沢古墳群小野沢文群に属する御厨社古墳である。内部施設に千曲川水系最大の横穴式石室を持ち、室全長11.2mを測り、勾玉や切子玉、耳環などが出土している。古墳時代後期の集落・祭祀遺跡では、環状に配列

された土器群が検出され、全国的にも注目された南条地区の青木下遺跡（1-8）が代表的である。青木下遺跡は現在整理中である。

奈良時代・平安時代の遺跡では、中之条地区に位置する中之条遺跡群（8）とその周辺遺跡に多くの調査例があり、この地域における奈良・平安時代の状況が徐々に解明されつつある。具体的には、寺浦遺跡（8-1）、上町遺跡（8-2）、東町遺跡（8-3）、宮上遺跡（8-5）、北川原遺跡（8-6）、豊饒堂遺跡（20）、開畝遺跡（21）で調査が実施され、古墳時代後期後半～平安時代までの集落遺構と遺物が多数出土している。また、平安時代では、生産遺跡として坂城地区の土井の入窯跡（32）があり、瓦の生産が行われていたことが分かっている。ここで生産された瓦は、現在の坂城小学校がある場所に8世紀末から9世紀頃に存在していたとされる込山廃寺跡（54）に用いられたほか、上田市信濃国分寺・国分尼寺、千曲市正法廃寺の補修用の差し瓦として使用されていたことが判明している。

中世に入ると、平安時代後期、寛治8年（嘉保元）（1094）に村上地区に配流されてきた源盛清が後に村上氏として勢力を持つようになり、戦国時代には村上義清が活躍するようになった。義清の頃、村上氏の居館は現在の満泉寺一帯に所在したとされ、その背後にそびえる葛尾山の山頂には、義清が使用した葛尾城跡（44）があるが現存していない。このほか、中世の遺跡では坂城地区の観音平経塚（55）をはじめとする経塚と、中之条地区の開畝製鉄遺跡（53）がある。観音平経塚は昭和54年と平成4年に調査が行われている（若林 1999）。開畝製鉄遺跡は、昭和52・53年に県内初の製鉄遺跡調査として、坂城町教育委員会によって学術調査が実施され、16世紀頃の製鉄炉址2基が確認されている。

江戸時代に入ると、現在の坂城地区を主体とする坂木村と中之条地区を主体とする中之条村は天和8年（1622）に幕府天領が置かれ、以後明治維新まで続いた。この地域を重要視していたことがうかがわれる。陣屋は最初、坂木（61）に置かれたが、明和4年（1767）に焼失し、その後、安永8年（1779）中之条に陣屋（67）が置かれている。

以上、坂城町の歴史について概略した。

註1 周知の御堂川古墳群東平文群1号墳・2号墳とは異なる可能性があるため、仮称とされている。今後、正式な古墳名称の確定が必要である。

#### 参考文献

- 坂城町教育委員会 1978『開畝製鉄遺跡―第1次調査報告』 1979『開畝製鉄遺跡―第2次調査報告』  
1993『宮上遺跡Ⅱ』 1995『東裏遺跡』 1996『寺浦遺跡Ⅱ』 1996『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』 2000『開畝遺跡Ⅲ』 2001『北川原遺跡Ⅱ』 2001『宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』 2002『保地遺跡Ⅱ』
- 森嶋 稔ほか 1981『坂城町誌』中巻 歴史編（一）
- 柳沢 亮 1998『第5節 開畝遺跡』『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 若林 卓 1999『第9章 東平古墳群』『第11章 観音平経塚』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21』（財）長野県埋蔵文化財センター

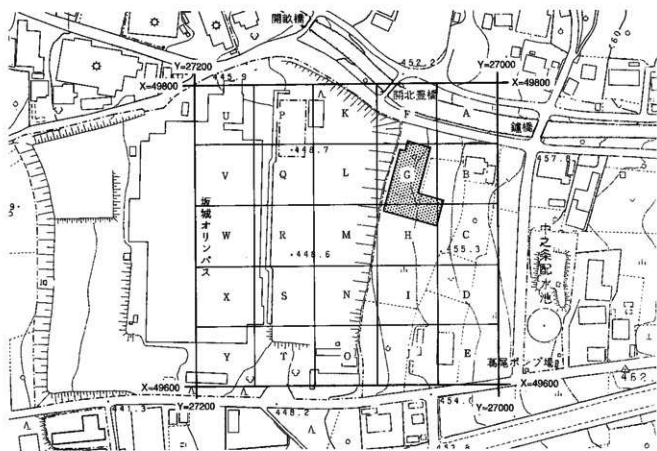


### 第三章 調査の概要

#### 第1節 調査の方法

本遺跡の調査には、調査区の遺構・遺物の正確な位置を記録できるように、平成14年4月に改正された測量法に基づいた国系国家座標の座標軸を基にグリッドを組んだ。この座標軸は以前、坂城町教育委員会が発掘調査時に用いていた座標軸とは異なるものであるが、2つの座標軸は相互に対照することができるので、過去の調査結果にも整合させることが可能である。

グリッドは、200m×200mの大グリッドを設け、区画を行った。その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定(第3図)し、東北端より、A・B・C・・・Y区とアルファベットの大文字で命名した。本調査区では、B・C、F～H区が相当する。さらにその中グリッドを4m×4mのグリッドで100区画に分刻し、南北列を北から算用数字で1・2・3・・・10、東西列を東から五十音順で、あ・い・う・・・こ、とし、各グリッドの北東交点を小グリッドとした。遺構外出土遺物の取り扱い及び遺構の検出位置は、この小グリッドの単位で行った。また、遺構の実測は1/20を基本として簡易造り方測量で行った。



第3図 豊鈴堂遺跡III発掘調査区設定図(1:2500)

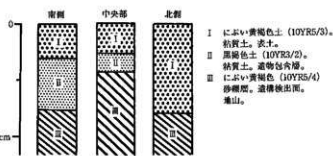
## 第2節 基本層序

調査区内の基本層序は、基本的に3層に分けられる。

I層は、にぶい黄褐色を呈する耕作土である。

II層は、黒褐色を呈する粘質土層で、遺物を含む遺物包含層となる。この層の堆積状況は調査区内でも場所によって異なり、住居址などの遺構の周辺では厚く堆積し、遺構のない部分では薄く堆積していた。また、この層は浅いレベルで確認できるため、II層の堆積が薄い部分では耕作などで攪乱されていることも考えられる。また、御堂川に近い調査区北端部では河川に伴う黄褐色の砂礫層がI層の下から堆積しており、II層は存在しない。

III層は、にぶい黄褐色を呈する砂礫層の地山である。遺構の検出はこの上面で行った。



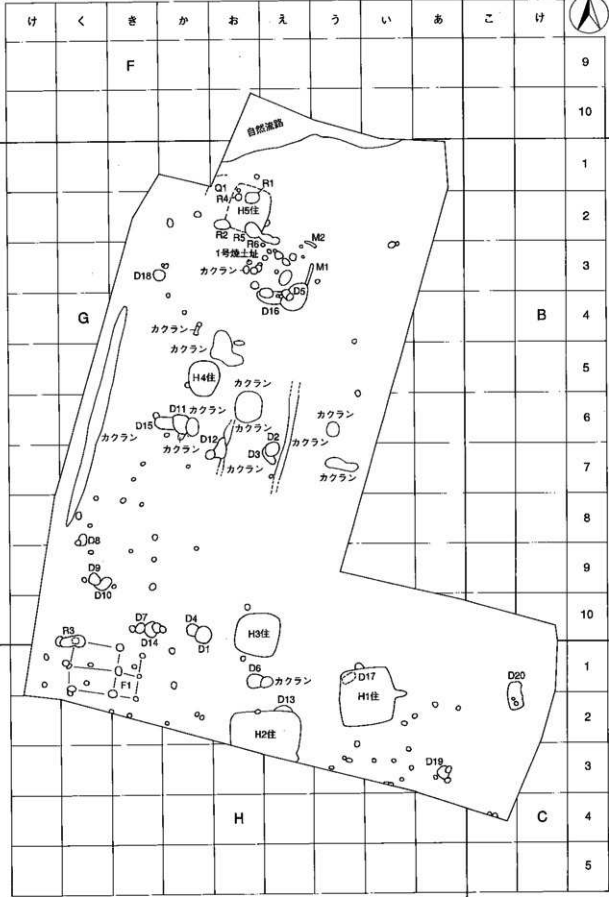
第4図 基本層序模式図

## 第3節 検出された遺構・遺物

豊饒堂遺跡Ⅲの発掘調査で検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

遺構) 奈良時代～平安時代	堅穴住居址	5棟
	製鉄関連遺構	5基
古墳時代～平安時代	掘立柱建物址	1棟
	土坑址	2基
時期不明	土坑址	18基
	焼土址	1基
	ピット	91基
	特殊遺構	1基
	溝状遺構	2基
遺物) 縄文時代～平安時代	土器・石器・鉄製品	

Y=27040



X=49750

X=49720

0 (1:300) 8m

第5図 豊饒堂遺跡川邊構配置図(1:300)

## 第IV章 調査の結果

### 第1節 竪穴住居址

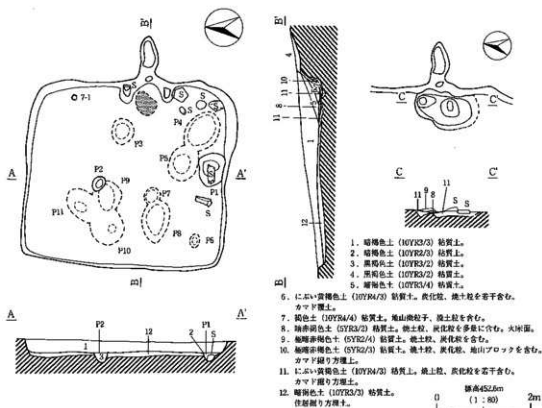
#### (1) H1号住居址

遺構 (第6図)

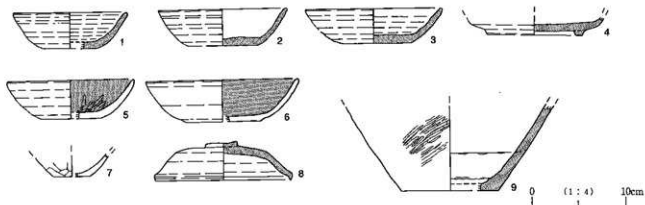
**検出位置** H11・2、H11・2グリッド。**重複関係** D17号土坑址、P47号ピットを切る。**平面形態及び壁面の状況** 南北4.2m、東西4.0mの隅丸方形を呈し、長軸の方位はN-10°-Eを示す。壁面の残存状況は10~40cmで、東側の方が深い。**覆土** 黒褐色粘質土に被覆されていた。**床面の状況** おおむね平坦であるが、堅固ではなかった。**カマド** 東壁中央部に検出された。遺存状態は悪く、両袖共ほとんど残っていない。主軸の方位はN-11°-Eを示す。**遺物の出土状況** 土師器、須恵器が出土している。

遺物 (第7図)

7-1~3は須恵器の坏である。いずれも底部は回転糸切り未調整である。7-4は須恵器の高台付坏の底部である。底部は全面を回転ヘラケズリした後、高台を貼り付けている。7-8は須恵器の坏蓋で天井部につまみが貼り付けられている。7-5、6は土師器の坏である。ロクロで整形され、内面は黒色処理されている。7-7は武蔵型甕の底部で、外面はヘラケズリが施されており、器壁は薄く整形されている。7-9は須恵器の甕の底部である。



第6図 H1号住居址・カマド実測図



第7図 H1号住居址出土土器実測図

時期 出土遺物から奈良時代から平安時代（8世紀後半～9世紀前半）に位置付けられる。

## (2) H2号住居址

### 遺構（第8図）

**検出位置** Hえ2・3、Hお2・3グリッド。**重複関係** D13号土坑址を切る。P13号ピットに切られる。**平面形態及び壁面の状況** 南側は調査区外に及んでいるため平面形態は不明であるが、東西5.5mの隅丸方形を呈すると思われる。東西の軸方位はN-93°-Eを示す。壁面の残存状況は25~50cmで、東側の方が深い。**覆土** 黒褐色粘質土に被覆されていた。**床面の状況** 平坦で比較的堅固であった。**カマド** 東壁で2基並んで検出され、北側から1号カマド、2号カマドと命名した。長軸の方位はそれぞれN-96°-E、N-99°-Eを示す。2号カマドについては、袖の一部が調査区外に及んでいるため、詳細は不明である。1号カマドは遺存状態が良好で、両袖部が残存していた。1号カマドは煙道部から火床部までの距離が見られ、2号カマドは火床部の焼土が大きく被熱を受けていた。2基はほぼ同時期に使用されていたと考えられるが、火床部の状況から使用方法あるいは使用頻度に違いがあったと思われる。**遺物の出土状況** カマドを中心に土師器、須恵器が多量に出土している。また、少量ながら鉄滓も出土している。

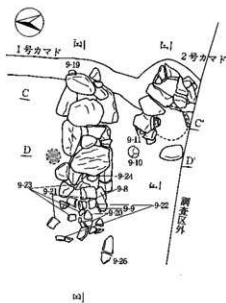
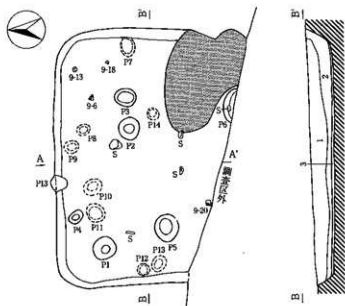
### 遺物（第9図）

代表的なものを図示した。9-1~5、18、20は須恵器である。9-1~3は坏でいずれも回転系切り未調整である。9-4は高台付坏、9-5、18、20は長頸壺である。

9-6~17、19、21~24は土師器である。9-6~15は坏である。いずれもロクロ調整が施されている。9-8、9は底部切り離し後に手持ちヘラケズリが施されるが、それ以外の個体は、回転系切り未調整である。9-21は羽釜で、底部は欠損している。9-22は鉢で、口唇部に1ヶ所注口部が作られている。9-23、24はロクロ整形の甕で底部は欠損している。

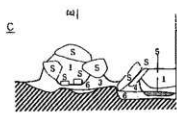
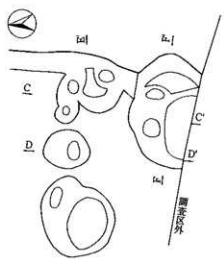
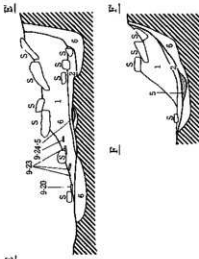
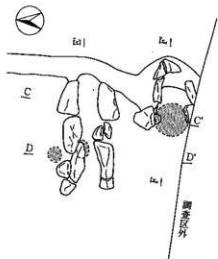
時期 本址はカマドが2基検出されていることと、出土遺物の所属時期の幅が広いことから、2棟の住居址が重複していることも考えられる。しかし、住居址の南側が調査区域外に続いているため、住居址の形状が明確に捉えられなかったことに加えて、床面の状態、土層断面から住居址の重複が検証できなかったため2棟が重複している可能性を残しつつ1棟として扱った。所属時期は出土遺物から、平安時代（9~10世紀）に位置付けられる。





1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘質土。  
#1~2mm程度の礫を少量含む。
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘質土。
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘質土。細り方礫土。

標高451.8m  
(1:80) 2m



調査区外

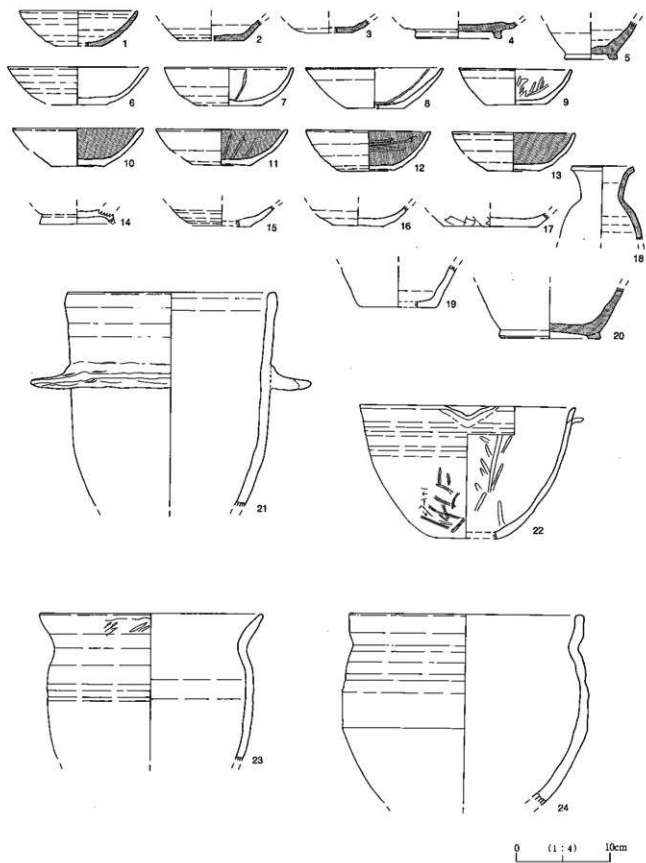


調査区外

1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘質土。
2. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘質土。粒子細かく、1層よりしまり強い。
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘質土。1号カマドソテ構築材と思われるがしまり弱い。
4. 暗褐色土 (10YR2/2) 粘質土。炭化殻を含む。2号カマドソテ構築材。
5. にぶい赤褐色土 (5YR4/4) 礫土。
6. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘質土。地山ブロックを含む。カマド覆り方礫土。

標高451.8m  
(1:40) 1m

第8図 H2号住居址・カマド実測図



第9图 H2号住居址出土土器实测图

### (3) H3号住居址

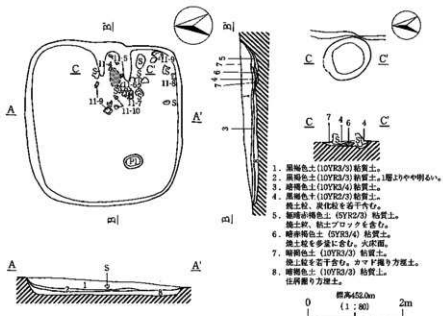
#### 遺構 (第10図)

検出位置 Gえ・お10、Hえ・お10グリッド。重複関係 なし。平面形態及び壁面の状況 南北3.3m、東西3.5mの隅丸方形を呈し、長軸の方位はN-93°-Eを示す。壁面の残存状況は3~30cmで、西壁はほとんど残っていなかった。覆土 黒褐色粘質土に被覆されていた。床面の状況 おおむね堅固で平坦であった。カマド 東壁で検出された。両袖の一部と火床部が遺存していた。長軸の方位はN-88°-Eを示す。

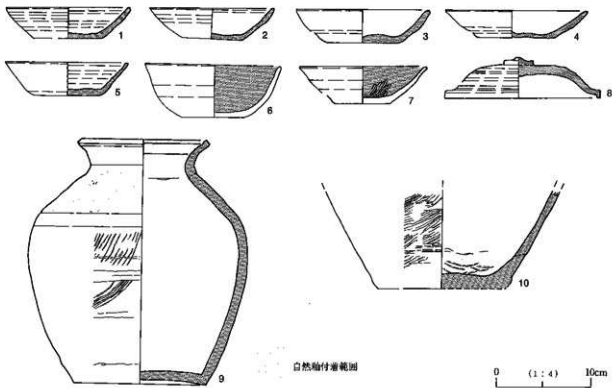
遺物の出土状況 カマド周辺を中心に土師器、須恵器が出土している。

#### 遺物 (第11図)

11-1~5は須恵器の坏で11-6、7は土師器の坏である。いずれもロクロで整形され、底部は回転糸切り未調整である。11-9、10は須恵器



第10図 H3号住居址・カマド実測図



第11図 H3号住居址出土土器実測図

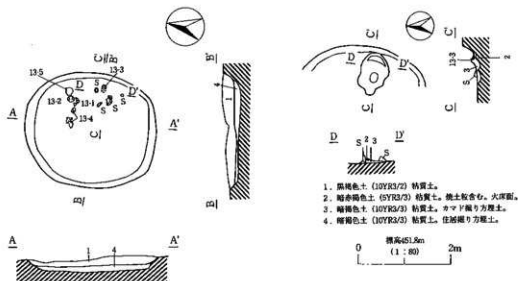
の臺である。11-9は自然軸が広範囲に付着しており、外面の肩部と、内面の口縁から頸部及び底部にかけて付着している。

時期 出土物から、H1号住居址とほぼ同じ奈良時代から平安時代（8世紀後半～9世紀前半）に位置付けられる。

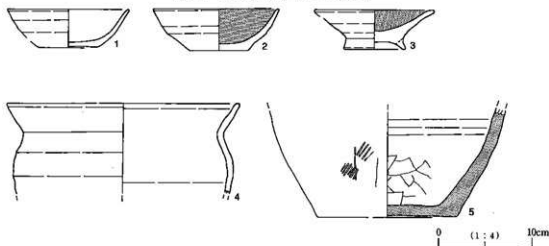
#### (4) H4号住居址

遺構 (第12図)

検出位置 Gお5・6、Gか5・6グリッド。重複関係 P84号ピットを切る。平面形態及び壁面の状況 南北2.8m、東西2.5mの隅丸方形を呈し、長軸の方位はN-5°-Eを示す。壁面の残存状況は10~20cmで、東側の方が深い。覆土 黒褐色粘質土に被覆されていた。床面の状況 堅固ではないがおおむね平坦であった。カマド 東壁の中央部付近で検出された。遺存状態は悪く、袖石と思われる石と火床部が検出された。遺物の出土状況 カマド周辺を中心に土師器、須恵器が出土している。



第12図 H4号住居址・カマド実測図



第13図 H4号住居址出土土器実測図

## 遺物 (第13図)

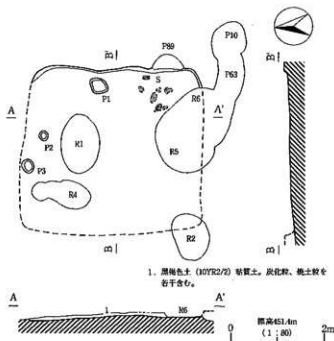
13-1、2は土師器の坏、13-3は土師器の皿である。これらはいずれもロクロ整形され、13-2、3は内面が黒色処理されている。13-4はいわゆる砲弾甕で口縁から胴部の上半部が残存している。13-5は須恵器の甕で、胴部の下半部から底部が残存している。底部の内面はヘラナデが施されている。

時期 出土遺物から平安時代(9世紀)に位置付けられる。

## (5) H5号住居址

### 遺構 (第14図)

検出位置 Gえ1・2、Gお1・2グリッド。  
重複関係 R1・2・4～6号製鉄関連遺構、P89に切られる。平面形態及び壁面の状況 西側がほとんど残っていないため、不明であるが、一辺約3.6mの隅丸方形を呈するものと思われる。長軸の方位はN-5°-Eを示す。壁面の残存状況は10～40cmで、東側の方が深い。覆土 黒褐色粘質土に被覆されていた。床面の状況 おおむね平坦であるが、堅固ではなかった。カマド 検出されなかった。しかし、東壁中央付近で焼土がブロック状に検出されていることからこの周辺にカマドが存在していた可能性が考えられる。遺物の出土状況 土師器、須恵器、鉄滓が出土しているが、図化できるものは出土していない。



1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘質土。炭化粒、焼土粒を若干含む。

第14図 H5号住居址実測図

時期 重複関係からR1、2、4～6以前の所産が与えられ、出土した土師器から奈良・平安時代に位置付けられる。

## 第2節 掘立柱建物址

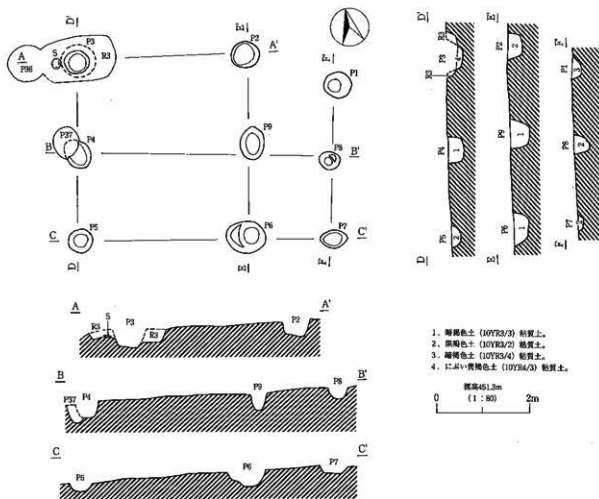
### (1) F1号掘立柱建物址

#### 遺構 (第15図)

検出位置 Gく10、Hき1・2、Hく1グリッド。重複関係 P5がP40号ピットを切る。P3がR3号製鉄関連遺構に切られる。P4がP37号ピットに切られる。平面形態 P2～6、9で構成される南北2間×東西1間の部分と底と考えられるP1、7、9で構成される。柱間は西列で約3.7m、南列で約5.4mを測る。ピット 直径50～80cmの円形あるいは楕円形を呈し、深さは、P5とP7が15cmと浅い他は30～40cmを測る。覆土 黒褐色粘質土(P4、6、9)、暗褐色粘質土(P2、5)、にぶい黄褐色粘質土(P1、3)に

被覆されていた。いずれのピットからも柱痕は検出されなかった。遺物の出土状況 P1、4で土師器と須恵器の破片が出土している。細片のため、詳細は不明である。

時期 出土遺物から、古墳時代から平安時代には位置付けられるが詳細な時期は不明である。



第15図 F1号独立柱遺物址実測図

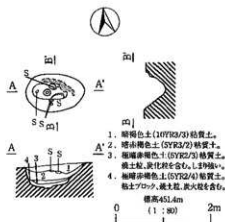
### 第3節 製鉄関連遺構

鉄滓や羽口を多量に出土し、覆土に焼土粒や炭化粒を多量に含む土坑状の遺構を製鉄関連遺構とした。遺構の性格など詳細については「第V章 総括」で触れる。

#### (1) R1号製鉄関連遺構

### 遺構 (第16図)

**検出位置** Gお2グリッド。重複関係 H5号住居址を切る。  
**平面形態** 南北0.7m、東西1.2mの楕円形を呈する。深さは約40cmを測るが、底面に直径約15cm、深さ約10cmのピット状の掘り込みを有する。長軸の方位はN-97°-Eを示す。覆土には焼土粒や炭化粒を含み、掘り方の一部に被熱による変色が見られた。  
**遺物の出土状況** 覆土中から土師器の柄や羽蓋、羽口、鉄滓が出土している。土器や羽口はいずれも遺存状態は悪い。羽口の出土は今回の製鉄関連遺構の中で一番多い。鉄滓は15.60kg出土している。

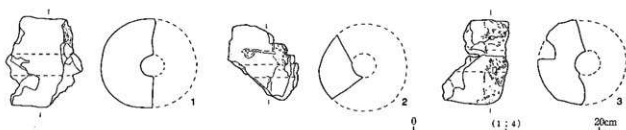


第16図 R1号製鉄関連遺構

### 遺物 (第17図)

羽口片のうち代表的なものを3点図示した。直径及び孔径は平均で9.8cm、2.6cmである。

**時期** 出土した土器から平安時代前半（9世紀前半）以降に位置付けられる。

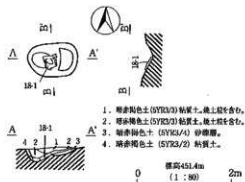


第17図 R1号製鉄関連遺構出土羽口実測図

### (2) R2号製鉄関連遺構

#### 遺構 (第18図)

**検出位置** Gお2、Gか2グリッド。重複関係 H5号住居址を切る。平面形態 南北0.8m、東西1.0mの楕円形を呈し、深さは20~30cmを測る。長軸の方位はN-91°-Eを示す。覆土には焼土粒や炭化粒を多量に含み底面は被熱により変色していた。  
**遺物の出土状況** 土師器の柄などの土器片と鉄滓が出土している。また、本址中央部の底面付近で検出された板状で中央部に円形の浅い窪みを有する石(18-1)も石製品である可能性が考えられるが、用途は不明である。



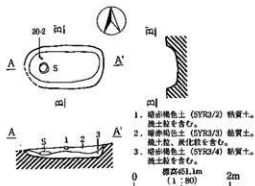
第18図 R2号製鉄関連遺構

**時期** 出土した土器から、平安時代前半（9世紀前半）以降に位置付けられる。

### (3) R3号製鉄関連遺構

遺構 (第19図)

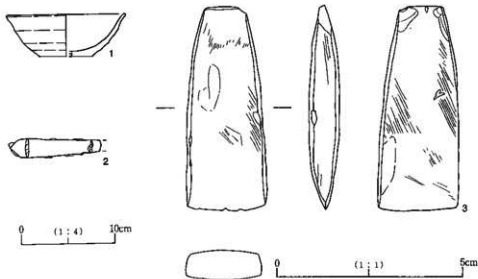
検出位置 G<10、H<10グリッド。重複関係 F1号掘立柱建物址、P36号ピットを切る。平面形態 南北0.9m、東西1.2mの楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。長軸の方位はN-89°-Eを示す。遺物の出土状況 鉄器、鉄滓、土師器が出土している。縄文土器や石器の混入も見られた。



第19図 R3号製鉄関連遺構

遺物 (第20図)

20-1は、土師器の坏でロクロ調整され底部は回転糸切り未調整である。20-2は錆びのため判然としなが、柄の部分が欠損した鉄製の刀子と思われる。20-3は磨製石斧で、混入品と思われる。



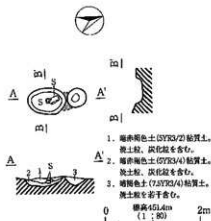
第20図 R3号製鉄関連遺構出土土器・石器・鉄器実測図

時期 時期を判断できる遺物に乏しいが、本遺跡の傾向により平安時代(9世紀後半~10世紀中葉)に位置付けられると思われる。

(4) R4号製鉄関連遺構

遺構 (第21図)

検出位置 Gお1・2グリッド。重複関係 H5号住居址を切る。平面形態 南北1.2m、東西0.6m、深さ20cmの楕円形の土坑状の部分と直径0.4m、深さ0.15mのピット状の部分を含めた形態を呈する。これらの覆土にはいずれも焼土が含まれていて類似していることと、これらの間に焼土が広がっていたことから同一の遺構とした。長軸の方位はN-5°-Eを示す。遺物の出土状況 鉄滓が1.01kg出土している。



第21図 R4号製鉄関連遺構

時期 時期を判断できる遺物がないため不明であるが、周辺の状態からR1、2号製鉄関連遺構と同時期(平安時代)の所産であると考えられる。

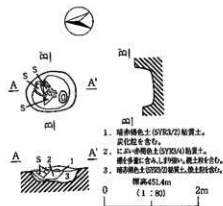


### (5) R 5号製鉄関連遺構

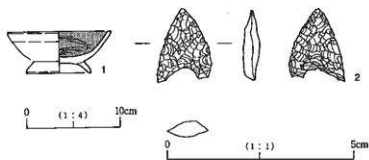
遺構 (第22図)

検出位置 Gお2グリッド。重複関係 H5号住居址、R6号製鉄関連遺構を切る。平面形態 南北1.0m、東西0.9mの不正円形を呈し、深さは約40cmを測るが、底面に直径約15cm、深さ約10cmのビット状の掘り込みを持つ。長軸の方位はN-4°-Eを示す。遺物の出土状況 土師器の碗(23-1)をはじめとする土器や鉄滓が出土している。また、黒曜石の無茎石鏃(23-2)の混入も見られる。

時期 出土遺物と重複関係から平安時代(9世紀後半~10世紀後半)の所産と考えられる。



第22図 R5号製鉄関連遺構

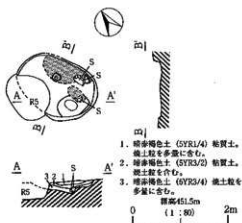


第23図 R5号製鉄関連遺構出土土器・石器実測図

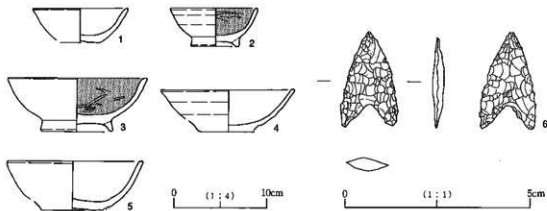
### (6) R6号製鉄関連遺構

遺構 (第24図)

検出位置 Gえ・お2グリッド。重複関係 H5号住居址を切る。R5号製鉄関連遺構に切られる。平面形態 長軸1.7m、短軸1.2mの楕円形を呈する。深さは15~25cmを測るが、底面に直径約15cm、深さ約10cmのビット状の掘り込みを持つ。長軸の方位はN-152°-Eを示す。覆土は焼土粒や炭化粒を多量に含む。遺物の出土状況 土師器、鉄滓、羽口が出土している他、石器の混入も見られる。



第24図 R6号製鉄関連遺構



第25図 R6号製鉄関連遺構出土土器・石器実測図

遺物 (第25図)

25-1はロクロ整形の土師器の坏である。25-2～5は土師器の椀で、いずれもロクロ整形されている。24-4、5はいずれも高台が欠損している。25-6は混入遺物であるが、黒曜石の無茎石鏃である。

時期 本址の所属時期は重複関係と出土遺物から、平安時代(9世紀後半～10世紀後半)に位置付けられる。

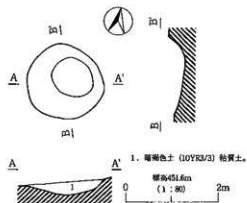
第4節 土坑址

(1) D1号土坑址

遺構 (第26図)

検出位置 Gか10グリッド。重複関係 D4号土坑址を切る。平面形態 長軸1.6m、短軸1.5mの不正円形を呈し、深さは30cmを測る。長軸の方位はN-160°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

時期 出土遺物がないため、不明である。



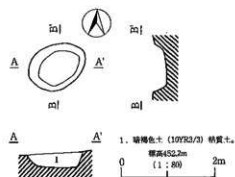
第26図 D1号土坑址実測図

(2) D2号土坑址

遺構 (第27図)

検出位置 Gえ6・7グリッド。重複関係 D3号土坑址を切る。平面形態 長軸1.2m、短軸0.9mの楕円形を呈し、深さは30cmを測る。長軸の方位はN-60°-Eを示す。遺物の出土状況 黒曜石の剥片が数点出土している。

時期 出土遺物が少なく、不明である。



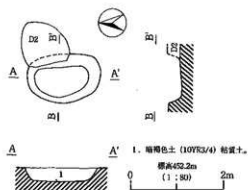
第27図 D2号土坑址実測図

(3) D3号土坑址

遺構 (第28図)

検出位置 Gえ7グリッド。重複関係 D2号土坑址に切られる。平面形態 長軸1.6m、短軸1.0mの楕円形を呈し、深さは30cmを測る。長軸の方位はN-178°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

時期 出土遺物がないため、不明である。



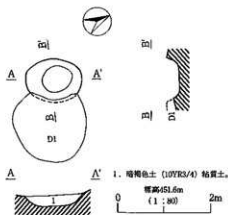
第28図 D3号土坑址実測図

#### (4) D4号土坑址

遺構 (第29図)

検出位置 Gか10グリッド。重複関係 D1号土坑址に切られる。平面形態 長軸1.2m、短軸0.9mの楕円形を呈し、深さは20cmを測る。長軸の方位はN-160°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

時期 出土物がないため、不明である。



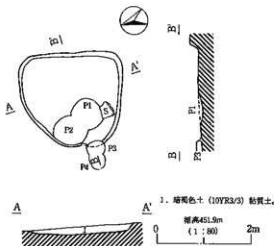
第29図 D4号土坑址実測図

#### (5) D5号土坑址

遺構 (第30図)

検出位置 Gえ3・4グリッド。重複関係 D16号土坑址、M1号溝址を切る。P1~3号ピットに切られる。平面形態 長軸2.2m、短軸2.2mの不正円形を呈する。深さは15cmを測る。遺物の出土状況 土師器、須恵器の破片が出土している。また、弥生時代後期の壺片や黒曜石の剥片が出土しているが、これらは混入したものとと思われる。

時期 古墳時代から平安時代に位置付けられるが、詳細な時期は不明である。



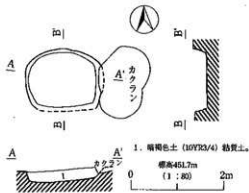
第30図 D5号土坑址実測図

#### (6) D6号土坑址

遺構 (第31図)

検出位置 Hお1・2グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸1.7m、短軸0.8mの楕円形を呈する。深さは30cmを測る。長軸の方位はN-96°-Eを示す。遺物の出土状況 土師器片や須恵器片が出土している。

時期 古墳時代から平安時代に位置付けられるが、詳細な時期は不明である。

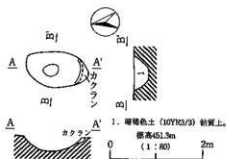


第31図 D6号土坑址実測図

#### (7) D7号土坑址

遺構 (第32図)

検出位置 Gき10グリッド。重複関係 D14号土坑址、P17号ピットを切る。平面形態 長軸1.2m、短軸0.8mの楕円形を呈する。深さは30cmを測る。長軸の方位はN-18°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。



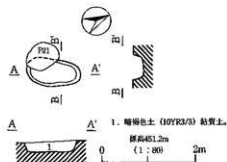
第32図 D7号土坑址実測図

時期 出土物がないため、不明である。

### (8) D 8号土坑址

遺構 (第33図)

検出位置 Hく8グリッド。重複関係 P21号ピットに切られる。平面形態 長軸1.1m、短軸0.5mの楕円形を呈する。深さは20cmを測る。長軸の方位はN-19°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。



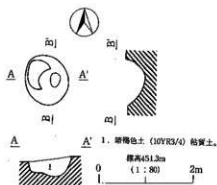
第33図 D 8号土坑址実測図

時期 出土物がないため、不明である。

### (9) D 9号土坑址

遺構 (第34図)

検出位置 Gく9グリッド。重複関係 D10号土坑址を切る。平面形態 長軸1.1m、短軸0.9mの不正円形を呈する。深さは40cmを測る。長軸の方位はN-132°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

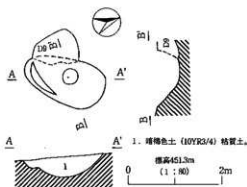


第34図 D 9号土坑址実測図

### (10) D10号土坑址

遺構 (第35図)

検出位置 Gく9グリッド。重複関係 D9号土坑址に切られる。平面形態 長軸1.7m、短軸0.8mの楕円形を呈する。深さは30cmを測る。長軸の方位はN-32°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

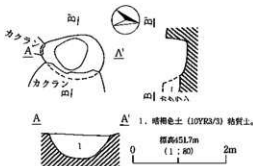


第35図 D10号土坑址実測図

### (11) D11号土坑址

遺構 (第36図)

検出位置 Gか6グリッド。重複関係 D15号土坑址を切る。平面形態 長軸1.8m、短軸0.9mの楕円形を呈する。深さは50cmを測る。長軸の方位はN-162°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。



第36図 D11号土坑址実測図

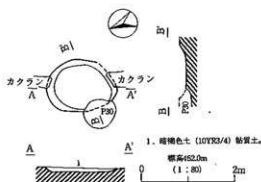
時期 出土物がないため、不明である。

## (12) D12号土坑址

遺構 (第37図)

検出位置 Hお6・7グリッド。重複関係 P30号ピットに切られる。平面形態 長軸1.5m、短軸1.1mの楕円形を呈する。深さは10cmを測る。長軸の方位はN-20°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

時期 出土遺物がなため、不明である。



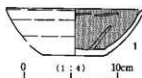
第37図 D12号土坑址実測図

## (13) D13号土坑址

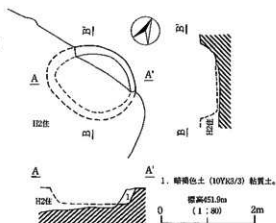
遺構 (第39図)

検出位置 Hえ2グリッド。重複関係 H2号住居址に切られる。平面形態 長軸1.8m、短軸1.6mの楕円形を呈するものと推定される。深さは30cmを測る。長軸の方位はN-56°-Eを示す。遺物の出土状況 土師器の坏が出土している (第38図)。38-1は、口径が推定で14.5cm、底径6.2cm、器高5.0cmを測り、底部は回転糸切り未調整である。

時期 出土遺物から奈良時代から平安時代に位置付けられる。



第38図 D13号土坑址出土土器実測図



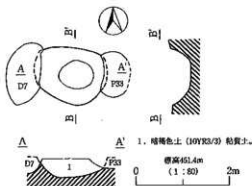
第39図 D13号土坑址実測図

## (14) D14号土坑址

遺構 (第40図)

検出位置 Gき10グリッド。重複関係 D7号土坑址、P33号ピットに切られる。平面形態 長軸は推定で1.5m、短軸1.2mの楕円形を呈する。深さは40cmを測る。長軸の方位はN-101°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

時期 出土遺物がなため、不明である。



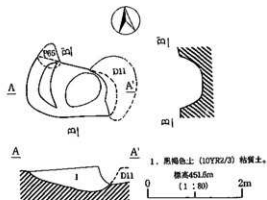
第40図 D14号土坑址実測図

### (15) D15号土坑址

遺構 (第41図)

検出位置 Gか・き6グリッド。重複関係 D11号土坑址、P65号ピットに切られる。平面形態 長軸は推定で1.9m、短軸1.1mの楕円形を呈する。深さは50cmを測る。長軸の方位はN-96°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

時期 出土遺物がないため、不明である。



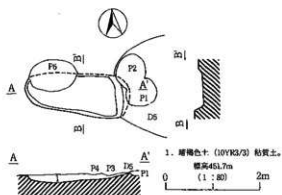
第41図 D15号土坑址実測図

### (16) D16号土坑址

遺構 (第42図)

検出位置 Gえ・お4グリッド。重複関係 D5号土坑址、P1~4・6号ピットに切られる。平面形態 長軸2.2m、短軸0.9mの長楕円形を呈する。深さは20cmを測る。長軸の方位はN-95°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

時期 出土遺物がないため、不明である。



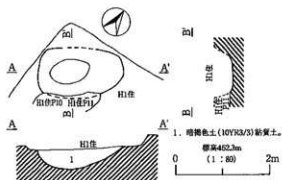
第42図 D16号土坑址実測図

### (17) D17号土坑址

遺構 (第43図)

検出位置 Hう1グリッド。重複関係 P47号ピットを切る。H1号住居址に切られる。平面形態 長軸1.8m、短軸1.0mの楕円形を呈する。深さは40cmを測る。長軸の方位はN-51°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

時期 出土遺物がないため詳細は不明であるが、重複関係から奈良、平安時代(8世紀後半~9世紀前半)以前の所産であると考えられる。



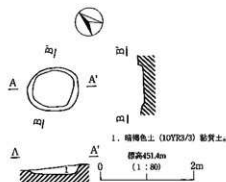
第43図 D17号土坑址実測図

### (18) D18号土坑址

遺構 (第44図)

検出位置 Gか・き3グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸1.1m、短軸0.9mの楕円形を呈する。深さは15cmを測る。長軸の方位はN-134°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

時期 出土遺物がないため、不明である。



第44図 D18号土坑址実測図

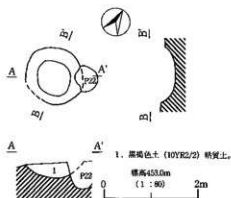
### (19) D19号土坑址

#### 遺構 (第45図)

検出位置 Hあ3グリッド。重複関係 P22号ピットに切られる。

平面形態 長軸1.3m、短軸1.2mの不正円形を呈する。深さは30cmを測る。長軸の方位はN-134°-Eを示す。遺物の出土状況 土器片が数点出土しているが、細片のため詳細は不明である。

時期 出土遺物が少なく不明である。



第45図 D19号土坑址実測図

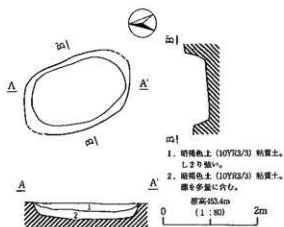
### (20) D20号土坑址

#### 遺構 (第46図)

検出位置 Cけ1・2、Cこ1・2グリッド。重複関係 P

75号ピットに切られる。平面形態 長軸2.5m、短軸1.5mの楕円形を呈する。深さは35cmを測る。長軸の方位はN-153°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

時期 出土遺物がないため、不明である。



第46図 D20号土坑址実測図

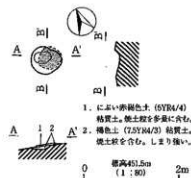
## 第5節 その他の遺構

### (1) 1号焼土址

#### 遺構 (第47図)

検出位置 Gお3グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸70cmの不正円形を呈し、深さは10cmを測るピット状の遺構であるが、覆土に焼土を多量に含んでいたことから、焼土址として扱った。鉄滓や羽口など製鉄に関わる遺物は出土していないが、周辺の状況から製鉄に関わる遺構である可能性も考えられる。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

時期 出土遺物がないため、不明である。



第47図 1号焼土址実測図

### (2) M1号溝状遺構

#### 遺構 (第48図)

検出位置 Gう3グリッド。重複関係 D5号土坑址に切られる。平面形態 幅20cm、深さ10cmの溝状を呈する。長軸の方位はN-15°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

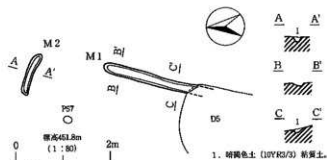
時期 出土遺物がないため詳細は不明であるが、重複関係から古墳～平安時代以前の所産と考えられる。

### (3) M2号溝状遺構

遺構 (第48図)

検出位置 Gう3、Gえ2・3グリッド。重複関係 なし。平面形態 長さ90cm、幅20cm、深さ10cmの溝状を呈する。長軸の方位はN-113°-Eを示す。遺物の出土状況 遺物は出土していない。

時期 出土物がないため、不明である。



第48図 M1号・M2号溝状遺構実測図

### (4) Q1号特殊遺構 (第5図)

本址はGお1グリッドの調査区西壁面で検出されたものであるが、深さ15cm程度の掘り込みが約1mの幅で確認されたのみであるため、本址の形態、性格、時期など詳細は不明である。

## 第V章 総括

### 1 集落について

今回の調査では縄文時代から平安時代に属する土器が出土した。このうち縄文時代から弥生時代に属する土器は、ほとんどが遺構に混入した状態で出土し、その量はわずかであった。しかし、平成5年度に実施された豊饒堂遺跡の調査でも縄文時代早期に位置付けられる特殊遺構が確認されているほか、弥生時代の竪穴住居が1棟確認されていることから、調査区周辺に縄文、弥生時代の小規模な集落が存在していたことが推測される。また、今回確認された時期不明の土坑址やピットのなかには縄文～弥生時代に構築されたものも含まれている可能性も否定できない。今後留意が必要である。

検出された竪穴住居址については、全てが同時期に属するものではなく、H1、3号住居址とH2、4、5号住居址でやや時期差（前者の方が古い）が見られ、集落規模は小さいが継続的に集落が存在していたことが調査の結果判明している。カマドについてはH5号住居址を除いた4棟が東壁にカマドを有する点で共通し、その周辺で遺物の集中が見られた。中でもH2号住居址で検出された2基のカマドは遺存状態が非常に良く、良好な資料といえる。特に、1号カマドについては、壁面から火床部までの距離が長い形状を呈しており、煙道部が短い通常のカマドとはやや特殊な形態と指摘できる。住居址の所見で述べたわけであるが、カマドが2基存在すること、出土土器にも時間差が見られることから、正直なところ詳細は不明であるが、カマドの使用に際し、煮炊き以外の別な用途で用いられたということも考えられる。今後の類例の増加を待ちたい。また、H1、3号住居址ではカマド周辺の東壁付近で板状の石が数点出土しているが、これらは何らかの作業に用いられたことも考えられる。

調査結果の詳細は第IV章で触れたわけであるが、今回の発掘調査によって検出された竪穴住居址は5棟を数えた。その所属時期は奈良～平安時代であって、8世紀後半から10世紀といった時間幅が与えられることになる。このことは以前行われた豊饒堂遺跡の調査結果でも同様な状況が判明しており、本遺跡の西側に所在する寺浦遺跡、寺浦遺跡Ⅱ、北川原遺跡Ⅱでの集落の形成時期が古墳時代後期にあることを考慮すると、



本遺跡の集落が形成された時期は遅く、規模的にも小さいものといえよう。このことは、古代律令国家の影響を多分に受けた結果と見られ、開墾あるいは荘園制度の中で集落が形成された結果とも考えられるが、今後の発掘調査の成果を待ちたい。

## 2 製鉄関連遺構について

今回の調査では、製鉄関連遺構が6基検出されたことも今回の調査結果の特徴である。これらは、鉄滓や羽口を出土し、覆土に焼土粒や炭化粒を多量に含む土坑状の遺構をもって製鉄関連遺構としたものである。町内においてこれらの製鉄関連遺構に類似する遺構は平成5年度の豊饒堂遺跡の調査でも確認されていることや、鉄滓や羽口などの製鉄関連遺物が、隣接する中之条遺跡群の寺浦遺跡の発掘調査でも出土していることから、この結果は調査区とその周辺の集落の各所において、製鉄関連の作業が行われていたことを窺わせるものである。

今回検出された製鉄関連遺構は形状や大きさがそれぞれ異なっているが、底面に小さな掘り込みをもつものがR1、5、6号製鉄関連遺構に見られることや、R3号製鉄関連遺構以外は調査区北西部に集中することといった傾向も見られた。調査区北西に集中することについては、調査区の北を流れる御堂川の存在が影響していることは考えられるが、用途については、排滓処理などが考えられるものの不明な部分が多く、今後の課題を残したといえる。

しかし、この場所で何らかの製鉄に関わる作業が行われ、ほぼ同時期の住居址がその周辺に存在していることが今回の調査によって明らかにされたわけであるが、今回の調査では本遺跡内で鍛冶に関わる作業を行っていた可能性が高いこと、居住施設と生産施設を同時に確認できたという点でも意義は大きいといえよう。さらに、調査地点の近くには16世紀頃の製鉄炉址が検出された開飲製鉄遺跡が存在していることもこの地域の古代、中世の状況を考える上で非常に重要な要素である。このことは今回の調査結果と合わせて、製鉄業が平安時代から行われていたことを推測させるものである。

また、町内では、今回検出された製鉄関連遺構とはほぼ同時期の製鉄に関わる遺跡として小山製鉄遺跡が挙げられる。(財)長野県埋蔵文化財センターが実施した調査では、小規模ではあるが精練過程から鍛練過程に至る鍛冶業が集中的に行われていたことを示す遺構や遺物が検出されており、今回検出された製鉄関連遺構との関連についても今後の検討課題であろう。

以上のように、今回の調査では中之条地区に大きく広がる奈良時代から平安時代にかけての集落の一端を確認できたことが大きな成果といえよう。いくつかの課題が残ったままであるが、それらは今後この地域で調査を進めていくなかで解決していきたい。

<参考文献（前出のものを除く）>

- 上田 真 1997「第2章 清水製鉄遺跡」【上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書22】(財)長野県埋蔵文化財センター  
若林 卓 1999「第12章 小山製鉄遺跡」【上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21】(財)長野県埋蔵文化財センター

出土遺物観察表 1

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)	残存度	調 整	胎 土	備 考
7-1	H 1 住	須恵器	坏	<12.0> 5.5 3.1	口縁~底部1/4	外周・内周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整	外周・内周・断面：7.5GY5/1 緑灰色土。	
2		須恵器	坏	<13.5> <7.2> 3.8	口縁~底部1/3	外周・内周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整	外周・内周・断面：10Y6/1 灰色土。	
3		須恵器	坏	<14.3> 7.1 3.7	口縁~底部2/3	外周・内周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整	外周・内周・断面：10Y6/1 褐色土。	焼成不良。
4		須恵器	高台付坏	10.0 —	底部2/3	外周・内周：ロクロコナナ 外周底部：全面を回転ヘラケズリ後、高台 足り付け	外周・内周・断面：7.5Y6/2 灰オリーブ色土。	
5		土師器	坏	<14.0> <6.4> 4.0	口縁~底部1/3	外周：ロクロコナナ 内周：黒色焼埋、ヘラミガキ 外周底部：手持ちヘラケズリ	外周・断面：10YR4/4 褐色土。	
6		土師器	坏	<16.0> <7.8> 4.4	口縁~底部1/3	外周：ロクロコナナ 内周：黒色焼埋、ヘラミガキ 外周底部：磨耗により不明	外周・断面：10YR5/4 にぶい黄褐色土。	
7		土師器	壺	3.9 —	底部1/3	内周：ナテ	外周・断面：10YR5/3にぶい 黄褐色土。 内周：10YR4/4 褐色土。	
8		須恵器	蓋	<14.3> — 4.0	天井~縁部1/2	外周：深井部回転ヘラケズリ。以下、ロク ロコナナ 内周：ロクロコナナ	外周・内周・断面：7.5Y4/2 灰オリーブ色土。	
9		須恵器	壺	10.3 —	底部1/4	外周：タタキ 内周：ナテ	外周：10GY4/1 暗緑灰色土。 内周・断面：2.5GY4/1 暗緑 灰色土。	
9-1	H 2 住	須恵器	坏	<12.5> <5.0> 3.8	底部1/3	外周・内周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整	外周・内周・断面：5GY6/1 オリーブ灰色土。	焼成不良。
2		須恵器	坏	<7.0> —	底部1/2	外周・内周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整	外周・内周・断面：5B5/1 青灰色土。	
3		須恵器	坏	<4.8> —	底部1/4	外周・内周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整	外周・内周・断面：5C5/1 緑灰色土。	
4		須恵器	高台付坏	<9.0> —	底部1/3	外周・内周：ロクロコナナ	外周・内周・断面：7.5Y5/3 灰オリーブ色土。	
5		須恵器	長頸壺?	<6.4> —	底部1/3	外周・内周：ロクロコナナ	外周・内周・断面：5G4/1 緑灰色土。	
6		土師器	坏	<15.0> 5.8 4.0	口縁~底部1/2	外周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整 内周：ヘラミガキ	外周・内周・断面：10YR5/3 にぶい黄褐色土。	
7		土師器	坏	<13.5> <6.6> 4.0	口縁~底部1/2	外周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整 内周：ヘラミガキ	外周・内周・断面：10YR6/4 にぶい黄褐色土。	
8		土師器	坏	<14.5> <6.0> 4.3	口縁~底部1/3	外周：ロクロコナナ 外周底部：手持ちヘラケズリ 内周：ヘラミガキ	外周・断面：2.5Y6/4 にぶい 黄土。 内周：10YR6/6 赤黄褐色土。	
9		土師器	坏	12.0 6.2 3.9	口縁~底部3/4	外周：ロクロコナナ 外周底部：手持ちヘラケズリ 内周：ヘラミガキ	外周・内周・断面：10YR6/4 にぶい黄褐色土。	
10		土師器	坏	<14.0> 5.7 4.0	口縁~底部1/2	外周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整 内周：黒色焼埋、ヘラミガキ	外周・断面：10YR6/3 にぶい 黄褐色土。	
11		土師器	坏	<13.8> 5.0 3.8	口縁~底部1/2	外周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整 内周：黒色焼埋、ヘラミガキ	外周・断面：10YR5/3 にぶい 黄褐色土。	
12		土師器	坏	13.0 5.2 4.3	ほぼ完形	外周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整 内周：黒色焼埋、ヘラミガキ	外周・断面：10YR5/4 にぶい 黄褐色土。	
13		土師器	坏	<13.0> <5.7> 4.0	口縁~底部1/2	外周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整 内周：黒色焼埋、ヘラミガキ	外周・断面：10YR7/4 にぶい 黄褐色土。	
14		土師器	輪	7.5 —	底部1/5	外周・内周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整	外周・断面：10YR7/4 にぶい 黄褐色土。	
17		土師器	壺	<10.0> —	底部1/2	外周：ヘラケズリ 内周：ヘラミガキ	外周・断面：10YR5/3 にぶい 黄褐色土。 内周：10YR6/4 にぶい黄褐色土。	
15		土師器	坏	<6.0> —	唇~底部1/3	外周・内周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整	外周・断面：10YR5/3 にぶい 黄褐色土。	
16		土師器	坏	5.3 —	底部定形	外周・内周：ロクロコナナ 外周底部：回転糸切り未調整	外周・断面：10YR5/6 黄褐色 土。	
17		土師器	壺	<10.0> —	底部1/2	外周：ヘラケズリ 内周：ヘラミガキ	外周・断面：10YR5/3 にぶい 黄褐色土。 内周：10YR6/4 にぶい黄褐色土。	
18		須恵器	長頸壺?	6.4 —	口縁~断面1/2	外周・内周：ロクロコナナ	外周・内周・断面：7.5GY5/1 緑灰色土。	
19		土師器	長頸壺?	<22.0> <28.5> <4.8>	底部1/2	外周：口縁~唇部上手、ロクロコナナ 唇部以下、回転ヘラケズリ 内周：ナテ	外周・断面：10YR4/3 にぶい 黄褐色土。 内周：10YR4/4 褐色土。	φ1~2mmの石片、 炭屑を含む。
20		須恵器	長頸壺?	<10.4> —	口縁~断面2/3	外周：回転ヘラケズリ? 内周：ナテ	外周・断面：5GY6/1 オリーブ 褐色土。 内周：10GY6/1 緑灰色土。	
21		土師器	羽釜	22.0 —	口縁~断面2/3	外周：口縁~唇部、ロクロコナナ 唇部以下、ヘラケズリ 内周：ロクロコナナ	外周・断面：10YR6/4 にぶい 黄褐色土。 内周：10YR6/3 にぶい黄褐色土。	唇部以下にスズ付 着
22		土師器	鉢	22.8 6.0 14.0	口縁~断面1/2	外周：口縁~唇部以上、ロクロコナナ 以下、ヘラケズリ 内周：ヘラミガキ	外周・内周・断面：10YR5/6 黄褐色土。	
23		土師器	壺	23.5 —	口縁~断面1/3	外周：口縁~唇部上手、ロクロコナナ 以下、ヘラケズリ 内周：ロクロコナナ	外周・断面：10YR6/4 にぶい 黄褐色土。 内周：10YR5/4 にぶい黄褐色土。	

出土遺物観察表 2

番号	遺物名	種類	器形	法量 (cm)	残存度	調査	備考
9-24	H2住	土師器	甕	<34.0> —	口縁~胴部3/3	外面:口縁~胴部上半 ロクロヨコナテ 内面:口縁~胴部下半 内面:ロクロヨコナテ	外面~内面~断面:10YR5/4 に灰い黄褐色土。
11-1	H3住	灰窯器	坏	13.0 7.2 3.2	口縁~底部1/3	外面、内面:ロクロヨコナテ 外面底部:脚輪糸切り未調整	外面~断面:10YK5/4 灰黄褐色土。
2		灰窯器	坏	13.2 6.3 3.3	口縁~底部4/5	外面、内面:ロクロヨコナテ 外面底部:脚輪糸切り未調整	外面~内面~断面:2.5Y6/1 黄灰色土。
3		土師器	坏	<14.2> <7.2> 3.5	口縁~底部1/2	外面、内面:ロクロヨコナテ 外面底部:脚輪糸切り未調整	外面~断面:7.5Y7/4 灰褐色土。 内面:10YR5/2 灰黄褐色土。
4		灰窯器	坏	15.0 8.0 3.9	口縁~底部2/3	外面、内面:ロクロヨコナテ 外面底部:脚輪糸切り未調整	外面~内面~断面:5Y6/1 黄灰色土。
5		灰窯器	坏	12.9 6.7 3.6	口縁~底部3/4	外面、内面:ロクロヨコナテ 外面底部:脚輪糸切り未調整	外面~内面:6C5/1 黄褐色土。
6		土師器	坏	14.2 6.5 5.5	口縁~底部1/3	外面:ロクロヨコナテ 外面底部:脚輪糸切り未調整 内面:黒色焼埋、ヘラミガキ	外面~断面:10YR6/3 に灰い 黄褐色土。
7		土師器	坏	<13.5> <5.5> 3.9	口縁~底部1/3	外面:ロクロヨコナテ 外面底部:脚輪糸切り未調整 内面:黒色焼埋、ヘラミガキ	外面~断面:10YR5/3 に灰い 黄褐色土。
8		灰窯器	甕	16.4 4.4	口縁~底部2/3	外面:口縁部 ヨコナテ 胴部 タテハケ、 内面:ナテ	外面~内面:10B4/1 暗黄灰色土。
9		灰窯器	甕	13.0 14.0 26.0	口縁~底部1/3	外面、内面:口縁~胴部上半 ロクロヨコナテ 内面:ナテ、外面タテキ、内面ナテ	外面~内面:5C5/3 黄灰色土。 断面:7.5Y6/1 緑灰色土。
10		灰窯器	甕	13.5 —	胴~底部3/4	外面:タテキ 内面:ヘラナテ	外面~内面:10C5/1 緑灰色土。 断面:7.5Y5/3 灰オリーブ色土。
13-1	H4住	土師器	坏	<13.0> 6.0 4.0	口縁~底部1/2	外面:ロクロヨコナテ 内面:ヘラミガキ	外面~断面:10YR6/4 に灰い 黄褐色土。 断面:10YR4/3 に灰い黄褐色土。
2		土師器	坏	13.3 6.0 4.3	完形	外面:ロクロヨコナテ 外面底部:脚輪糸切り未調整 内面:黒色焼埋、ヘラミガキ	外面:10YR6/6 明黄褐色土。
3		土師器	皿	12.5 6.4 4.2	口縁~底部1/3	外面:ロクロヨコナテ 内面:ヘラミガキ	外面~断面:10YR6/4 に灰い 黄褐色土。
4		土師器	甕	<34.6> —	口縁~胴部1/4	外面、内面:ロクロヨコナテ	外面~内面~断面:10YR5/4 に灰い 黄褐色土。
5		灰窯器	甕	<14.6> —	底部1/3	外面:タテキ 内面:ヘラナテ	外面:7.5Y7/3 暗緑褐色土。 内面:7.5Y6/1 暗緑褐色土。 断面:2.5Y7/4 暗オリーブ灰色土。
17-1	R1	土製品	瓶口	底径:<10.0> 孔径:<2.5>			
2		土製品	瓶口	底径:<9.5> 孔径:<2.5>			
3		土製品	瓶口	底径:<9.5> 孔径:<2.7>			
20-1	R3	土師器	坏	<12.7> <5.5> 4.4	口縁~底部1/3	外面:ロクロヨコナテ 内面:ヘラミガキ?	外面~内面~断面:10YR6/6 明黄褐色土。
2		鉄製品	刀子	長さ:7.9 幅:2.1 厚さ:0.3			
3		石器	磨製石斧	長さ:7.4 幅:2.1 厚さ:0.9	完形		
23-1	R5	土師器	瓶	<10.8> 5.7 4.4	口縁~底部1/3	外面:ロクロヨコナテ 内面:黒色焼埋、ヘラミガキ	外面~断面:10YR4/3 に灰い黄褐色土。
2		石器	石錘	長さ:2.0 幅:1.4 厚さ:0.4	ほぼ完形		
25-1	R6	土師器	坏	<10.1> 4.2 3.6	口縁~底部1/2	外面:ロクロヨコナテ 内面:ヘラミガキ?	外面~内面~断面:10YR6/4 に灰い 黄褐色土。
2		土師器	瓶	9.2 5.0 4.0	完形	外面:ロクロヨコナテ 内面:黒色焼埋、ヘラミガキ	外面~断面:10YR6/4 に灰い 黄褐色土。
3		土師器	瓶	14.5 7.3 5.6	口縁~底部2/3	外面:ロクロヨコナテ 内面:ヘラミガキ	外面~断面:10YR6/4 に灰い 黄褐色土。
4		土師器	瓶	<14.2> —	口縁~底部1/3	外面:ロクロヨコナテ 内面:ヘラミガキ	外面~内面~断面:10YR6/4 に灰い黄褐色土。
5		土師器	瓶	<14.2> —	口縁~底部1/3	外面:ロクロヨコナテ 内面:ヘラミガキ	外面~断面:10YR6/3 に灰い 黄褐色土。内面:10YR5/2 灰黄褐色土。
6		石器	石錘	長さ:2.6 幅:1.4 厚さ:0.3	ほぼ完形		
30-1	D13	土師器	坏	<14.5> 6.2 5.0	口縁~底部2/3	外面:ロクロヨコナテ 外面底部:脚輪糸切り未調整 内面:黒色焼埋、ヘラミガキ	外面~断面:10YR7/4 に灰い 黄褐色土。



H1号住居址 西より



H1号住居址カマド 西より



H2号住居址 西より



H2号住居址カマド石組検出状況 西より



H2号住居址1号カマド 西より



H2号住居址2号カマド 西より



H3号住居址 西より



H3号住居址カマド 西より



H4号住居址 西より



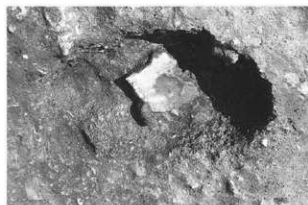
H4号住居址カマド 西より



H5号住居址 西より



R1号製鉄関連遺構 北より



R2号製鉄関連遺構 北より



R3号製鉄関連遺構 北より



R4号製鉄関連遺構 東より



R5号製鉄関連遺構 西より



R 6 号製鉄関連遺構 西より



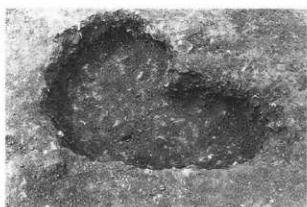
F 1 号掘立柱建物址 (航空写真)



D 5 号土坑址 西より



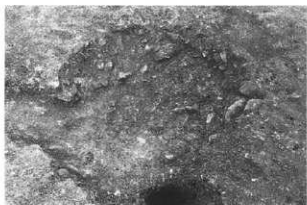
D 6 号土坑址 北より



D 8 号土坑址 東より



D 18 号土坑址 北東より



D 19 号土坑址 東より



作業風景



H1号住居址7-8 (1:2)



H1号住居址7-8 (1:2)



H2号住居址 9-12 (1:2)



H2号住居址9-12 (1:4)



H2号住居址9-22 (1:3)



H3号住居址11-2 (1:2)



H3号住居址11-5 (1:2)



H3号住居址11-6 (1:2)



H 3号住居址11-8 (1:2)



H 3号住居址11-9 (1:4)



H 4号住居址13-2 (1:2)



H 4号住居址13-3 (1:2)



R 6号製鉄関連遺構25-2 (1:2)

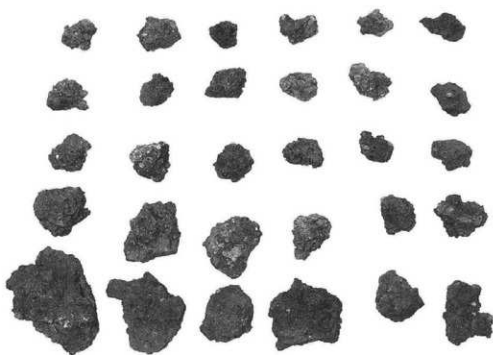


R 3号製鉄関連遺構20-2 (3:4)

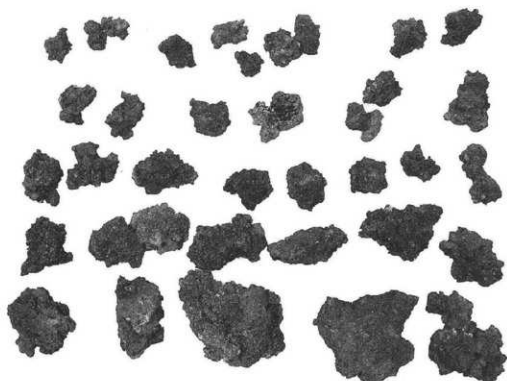


R 1号製鉄関連遺構17-1 (1:3)





R 1 号製鉄関通遺構出土鉄滓 (1 : 3)



R 4 号製鉄関通遺構出土鉄滓 (1 : 3)

## あとがき

坂城町発掘調査指導者 塩入 秀敏

坂城町の東に接する小県郡真田町との境にそびえる大峯山(1328m)・大道山(1289m)を水源として流れ下り千曲川に注ぐ御堂川は、南側を流れる谷川とともに中之条から南条にかけて大規模な複合扇状地を形成している。この扇状地上に広がる畑地帯は坂城町の経済の一端を担う重要な土地だった。そこに、高度経済成長時代から何社もの工場が進出し、それがまた、工業立町の経済を力強く支えてきた。

豊饒堂遺跡はこの御堂川扇状地の扇尖に立地している。かつて、平成5年(1993)には県単高速道路関連道路(通称坂城インター線)改良事業施工に先立って、また、平成13年(2001)にはふるさと農道建設に先立って発掘調査が実施されており、弥生・奈良・平安時代に属する住居址・掘立柱建物址・火葬墓址などが検出されている。同じ御堂川扇状地の扇尖から扇端にかけて大規模に展開する中之条遺跡群、上流右岸の御堂川古墳群などの存在と合わせて考えると、この扇状地面は弥生時代には小規模ながら開発が始められ、古墳時代から奈良・平安時代には順調に開発が進められたらしいことが窺える。坂城三条の一つ「中条」が拠って立った基盤は、千曲川右岸の沖積地もさることながら、むしろこの扇状地面の方に重きがあったと考えるべきだろう。

今回の発掘調査では、奈良時代ないし平安時代に属すると考えられる竪穴式住居址5・掘立柱建物址1・製鉄関連遺構6・土坑址20などが検出された。住居址・建物址のありようはごく一般的であり、H2号住居址が東壁に2基のカマドをもつ点でやや特異であるほかは、扇状地面における該期居住の証を増やしたことくらいしか言うべきことはない。

一方、調査区域の北に偏して6基がまとまって検出された製鉄関連遺構は、このたびの調査だけではなく、本遺跡および周辺の諸遺跡を含めた過去の発掘調査結果の中でも特筆に値すると言っても言い過ぎではないだろう。というのは、奈良時代から平安時代前期は土地の私的所有のための開墾が進展した時期で、大小規模の土地開発が活発に行われ、そのために鉄製農具の需要が急増し、必然的に在地の製鉄施設や鍛冶施設が必要になったと考えられるからである。隣接する中之条遺跡群中の守浦遺跡でも羽口や鉄滓などの製鉄関連遺物が出土していることも視野に入れて考えると、この地帯にはさらに多くの製鉄関連施設が存在したと思われる。今回検出された製鉄関連遺構はいずれも規模の小さいものである。おそらく一度の操業で破壊し、近くにまた築くといった程度のものであったと考えられる。しかし、当時の開墾が一般農民個人ではできなかったのと同様に、小規模の製鉄でも開墾主体だったと考えられる大社寺や在地の豪族が独占していたものと思われるが、まだあまり多くを語れる段階ではない。今後の調査と研究を俟ちたい。

御堂川を挟んで北側に存在する開削製鉄遺跡は、ずっと後世の16世紀に属し、しかももっと大規模のもので、本遺跡の製鉄関連遺構との直接的な関連は求めたいが、製鉄に関わり深いといわれる竜田の神が近くに祀られていることから、少なくとも、遺跡地周辺が製鉄に必要な条件を備えた地であったと考えることはできよう。

終わりに、今回の発掘調査の実施に際して深いご理解とご協力を賜った株式会社ウインテックと、調査に従事された皆さん、本書上梓までに様々な面でご支援ご教示くださった方々に謝意を申し上げ、あとがきとさせていただきます。

平成16年(2004)3月

報告書抄録

ふりがな	ぶぎょうどういせきさん							
書名	豊饒堂遺跡Ⅱ							
副書名	株式会社ウインテック工場建設に係る緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	塩入秀敏・齋藤達也							
編集機関	坂城町教育委員会							
所在地	〒389-0602 長野県埴科郡坂城町大字中之条2222 TEL 0268-82-1109							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
豊饒堂遺跡Ⅱ	埴科郡 坂城町 大字中之条	20521		36° 26' 42"	138° 11' 01"	2003年3月10日 ～2004年4月17日	1432㎡	工場建設事 業に伴う緊 急発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
豊饒堂遺跡Ⅱ	集落址	縄文～平安	堅穴住居址	5棟	土師器、須恵器、弥 生土器、縄文土器、 鉄製品、鉄滓、石製 品、石器	古代の集落址の調査		
			製鉄関連遺構	5基				
			竪立柱建物址	1棟				
			土坑址	20基				
			ピット	91基				
			縄土埴	1基				
			溝状遺構	2基				
			特殊遺構	1基				

## 坂城町埋蔵文化財調査報告書

	「開畝製鉄遺跡-第1次調査報告書」	1977
	「開畝製鉄遺跡-第2次調査報告書」	1978
	「東裏遺跡」	1983
	「中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅱ」(概報)	1993
	「南条遺跡群 塚田遺跡」	1993
第1集	「南条遺跡群 東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡」	1994
第2集	「町内遺跡発掘調査報告書」	1994
第3集	「町内遺跡発掘調査報告書」	1995
第4集	「南条遺跡群 塚田遺跡Ⅱ」	1995
第5集	「豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡」	1996
第6集	「中之条遺跡群 寺浦遺跡Ⅱ」	1996
第7集	「中之条遺跡群 上町遺跡Ⅱ」	1996
第8集	「上五明条里水田址」	1996
第9集	「町内遺跡発掘調査報告書1995」	1996
第10集	「坂城町試掘調査・立会い調査報告書」	1996
第11集	「町内遺跡発掘調査報告書1996」	1997
第12集	「戌久保・町横尾遺跡」	1998
第13集	「込山Bほか 発掘調査報告書 1997」	1998
第14集	「町内遺跡発掘調査報告書1998」	1999
第15集	「町内遺跡発掘調査報告書1999」	2000
第16集	「開畝遺跡Ⅲ」	2000
第17集	「中之条遺跡群 北川原遺跡Ⅱ」	2001
第18集	「町内遺跡発掘調査報告書2000」	2001
第19集	「中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」	2001
第20集	「金井東遺跡群 保地遺跡Ⅱ」	2002
第21集	「町内遺跡発掘調査報告書2001」	2002
第22集	「町内遺跡発掘調査報告書2002」	2003
第23集	「豊饒堂遺跡Ⅲ」(本書)	2004

---

発行日	2004年3月31日
編集者	坂城町教育委員会 〒389-0602 長野県埴科郡坂城町大字中之条2222番地 TEL 0268 (82) 1109
印刷者	信毎書籍印刷株式会社 〒381-0037 長野県長野市西和田470 TEL 026 (243) 2105

---

